

調査結果の概要

■ 平成29年度の成果

- 大阪市内の暑熱環境には地域差があり、熱中症搬送者数についても地域性がみられることがわかった。
- 擬似温暖化実験のための温暖化差分を求めたところ、大阪の8月の地上付近の気温には3.6°Cの差分があった。

■ 明らかとなった課題

- 「熱ストレス」の評価に活用可能なWBGTの測定は環境省による市内1地点のみの実施となっており、大阪府・市域の暑熱環境のきめ細かな把握や適応策の検討は困難な状況である。

■ 平成30年度の調査計画

- ① 熱ストレス(体感指標)と熱中症リスク(搬送者数)の関係解析の実施
 - WBGT観測及び気象衛星画像の解析から大阪府・市域の現状の暑熱環境を面的に把握する。
 - 熱ストレスと熱中症リスクの関係性(熱中症リスクモデル)を見出す。
- ② 気候変動シナリオを用いたヒートアイランド現象の将来予測・影響評価
 - 暑熱環境把握結果等により、現況再現計算結果の妥当性検証及びバイアス補正を実施する。
 - 擬似温暖化実験による将来予測結果及び熱中症リスクモデルを用いて影響評価を実施する。
- ③ 適応策の検討
 - ヒートアイランドの各対策手法の効果・有効性調査を実施する。

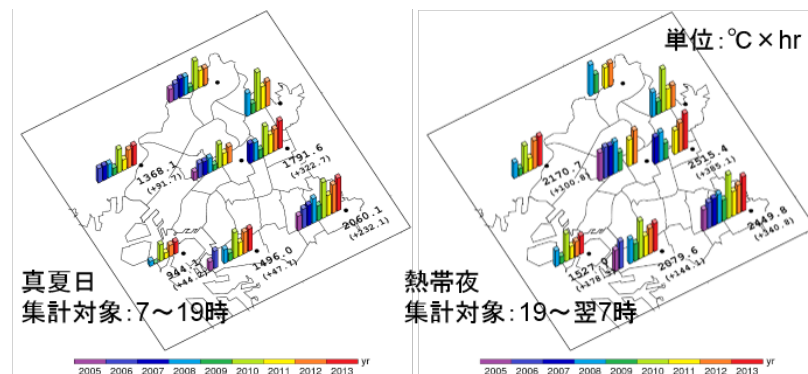


図1 大阪市内8地点における真夏日及び熱帯夜のデGREEアワー※

出典: 大阪市環境局「ヒートアイランドモニタリング調査」(2005~2013年)

※「デGREEアワー」

規定の気温(真夏日: 30°C以上、熱帯夜25°C以上)となった時間と超えた気温の積算値